

# 研 究 紀 要

第 6 号

1989

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 目 次

羽状縄文系土器の文様構成（点描）—1	黒坂楨二……1
集落資料集成の一方法 —— 縄文時代中期集落を中心として ——	石塚和則……29
前方後方墳出土土器の研究	高橋一夫……35
関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差	中村倉司……95
北武藏における古瓦の基礎的研究Ⅲ	昼間孝志・宮 昌之 木戸春夫・高崎光司……125 赤熊浩一

# 関東地方における竈・大形甌・須恵器 出現時期の地域差

中 村 倉 司

## はじめに

埼玉県において最初に竈が出現したのは、県北部の児玉地方であるというが定説となっている。1957年、本庄市「本松遺跡第四号住居跡の調査が行なわれ、それが『野田市三ツ堀遺跡』(横川1963)で横川好富によって検討された1963年以来のことである。埼玉最古の竈は、そのまま関東最古でもあるという認識は、現在までのところ支持されているか否かはともかくとして、その反論は提示されていない。この地に竈という外來の文化要素が、何故最も早く出現したのか興味深い事象である。この原因を究明するには、同じ外來要素である朝鮮半島系土器・須恵器・大形甌や横穴式石室、更に在地の問題など総合的な視野から検討しなければならない。しかし、本稿ではその用意がないので、ここでは竈・大形甌と須恵器に対象を絞って検討してみたい。これらの要素は切り離す事のできない事象であるが、伝播の過程において若干のズレをもって出現している。一般的に、大形甌・須恵器は竈に先行して出現する。

ところで、大形甌・竈・須恵器、あるいは須恵器杯を模倣した土師器杯(模倣杯)の出現は、從来鬼高式期開始の指標として捉えられてきた。その後新資料の増加に伴い、この現象は和泉期の新しい段階からであると言う見解に修正され、和泉式土器の型式内容を検討する段階にきている。近年の成果によれば、竈は北九州(福岡県)では弥生時代後期、近畿では古墳時代前期には散見されている(西谷1983)。しかし、この竈が直ちに普及する訳ではなく、本稿で意図する竈とは直接に関係するものではないと考えておきたい。竈が住居の基本的な施設として普遍的な存在となるのは、汎日本的にみて古墳時代後期になってからである。古墳時代後期、すなわち鬼高式に竈・大形甌・須恵器・模倣杯が出現するという考えは、最近では鬼高式土器の捉え方の相違によって必ずしも共通の認識とはなっていないばかりか、現在では否定的な見解が大勢を占めている。

竈・大形甌・須恵器の各地における出現時期を把握するには、微視的な土器編年を確立しなければならない。しかし、それは容易なことではない。各地域の土器編年は在地資料の詳細な分析を基調として、それに須恵器の共伴関係に基づいて相関関係を求めている。そして、実年代も須恵器から導いている。すなわち、須恵器の伝世を考慮する必要がないという前提に立っている訳である。伝世品の問題は今後の検討課題であるが、須恵器に限らず土師器についても後世に『残存』するものは認められる。大まかな編年には、須恵器の共伴は有効であるが、その限界も意識しておく必要がある。各地域において最も豊富な資料は、在地の土師器である。しかし、これには地域差があり広範な地域の編年指標とすることは不可能である。よって、その整合性に不安を覚えつつも須恵器に頼る以外に方法がないのが現状である。とは言え初期の須恵器資料は充分ではなく、未だ共通の認識となる編年は提示されていない。本稿では埼玉県北部の資料を土器編年の基軸に据え、それを

各地域に普遍的に認められる堆の変遷を指標として、関東各地の土器の併行関係を求めていた。年代観は信頼できると判断された共伴須恵器に時間を求めるという、不安定な基盤に立った試行である事をお断りしておきたい。

## 1. 埼玉県

### 1. 地区の設定

埼玉県は、秩父山地に源を発する荒川によって地形的に大きく分けられる。まず上流の秩父盆地を中心とする地域を『秩父地域』とする。中流では左岸の北部に位置する児玉・大里郡を『児玉地域』とする。下流では右岸・左岸に大きく分けられ、更にそれぞれ南北に分けられる。左岸は北部の行田市周辺を『埼玉地域』、南部の大宮台地を中心とする地域を『大宮地域』とし、右岸は北部の比企と入間郡の一部を『比企地域』、南部の入間と北足立郡の一部を『入間地域』とする。これらの地域では、大形甌の形態に相違が見られる(後述)。

### 2. 土器の分類と縦年

該期の土器縦年については、『宇佐久保遺跡』の付編(中村1979)で述べたことがある。ここでは、所謂鬼高峰期全般について縦年を試みた。厳密に言うならば甌の出現期以降を対象としたので、実際には和泉期のある時期を含んでいる。その後、利根川章彦によって拙稿と同時期の土器縦年が旱示された(利根川1982)。拙稿では図を掲載していなかったために、十分に理解されなかつたので、ここに図を示して先の縦年の不備を補いたい。しかし、本稿で取り上げる時期は甌出現期についてなので、『宇佐久保縦年』の「第Ⅰ段階」から「第Ⅲ段階」に限って検討するに留めたい。当時、甌・大形甌・須恵器は同時期に出現するという前提があったが、その後の検討の結果、後二者は甌に先行することが解った。そのため本稿では、『宇佐久保縦年』の第Ⅰ段階以前にⅠ期を設け、「第Ⅰ段階」をⅡ期、「第Ⅱ段階」をⅢ期、「第Ⅲ段階」をⅣ期としたい。なお、縦年は資料の豊富な児玉地域を中心に県北部に限定している。

#### a. 分類

- |  |                         |
|--|-------------------------|
| 甌A…口縁部が段をもつもの。   | B…素口縁部のもの。              |
| 甌A…小形のもの(小形甌)。   | B…大形のもの(大形甌)。           |
| 甌A…小形のもの(小形甌)。   | B…大形のもの(大形甌)。           |
| 椀A…小形甌の形態を呈するもの。                                       | B…口縁部が短く外反し、胴部の膨らむもの。   |
| C…平底の底部から直線的に立ち上がり口縁部が短く外反するもの。                        |                         |
| D…偏平な体部を持ち、口縁部が外反するもの。                                 |                         |
| E…体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部と体部の境が無く、器高の深いもの。また、浅い杯状を呈するものもある。 |                         |
| 杯A…体部から口縁部が屈曲、外反して立ち上がるるもの(源初杯A)。                      |                         |
| B…直線的な体部から口縁部が上方に屈曲して立ち上がるもの(源初杯B)。                    |                         |
| C…須恵器の影響を受けていると考えられるもの。                                |                         |
| 高杯A…椀を載せるもの。   | B…杯・脚部に屈曲部をもつもの(和泉型高杯)。 |

C…杯・脚部のいずれかに段をもつもの(段付高杯)。

b. 編 年 (第1回)

I期：愛宕遺跡第3・7号住居跡(駒宮1976)

壺Aは、口縁部の屈曲部が上位にあり、屈曲の度合も強い。壺Bは、球状の胴部と長い口縁部をもち、口唇部は平坦となる。大形壺(壺B)は口縁部が短く、「く」の字状に屈曲し、胴部は球形を呈する。口唇部は丸い。壺と壺の明瞭な形態差は存在しない。小形瓶は、内湾気味に大きく開いて立ち上がる。大形瓶は初現であるが、既に長胴化している。椀は小形壺状を呈するもの(椀A)が存在するのみである。壺は口縁部が長く、最大径は口縁部にある。大きさは大・中・小があり、多様である。高杯Aは存在しない。高杯Bは杯部が深く、脚内面にはヘソと積み上げ痕跡を残すものが多い。高杯Cは、杯部に突帯をもつ。

II期：諏訪遺跡30・32号住居跡(柿沼1979)・古川遺跡8・22号住居跡(柿沼1978)

壺Aは、口縁部の屈曲位置が下位になり、突帯で表現されるようになる。壺Bは、I期と同様である。大形壺は口縁部の屈曲が弱くなり、上方に立ち上がる。極めて僅かに長胴化の兆しが窺える。小形瓶は立ち上がり角度を増す。大形瓶は胴部の膨らむもので、多孔・中央孔、それに取っ手を持つものも散見される。また大形壺の底部をそのまま穿孔した形態のものも見られる。椀Aは、器高を減ずる。椀B・C・Dが初現する。椀の底部は、基本的に丸底のものは見られない。

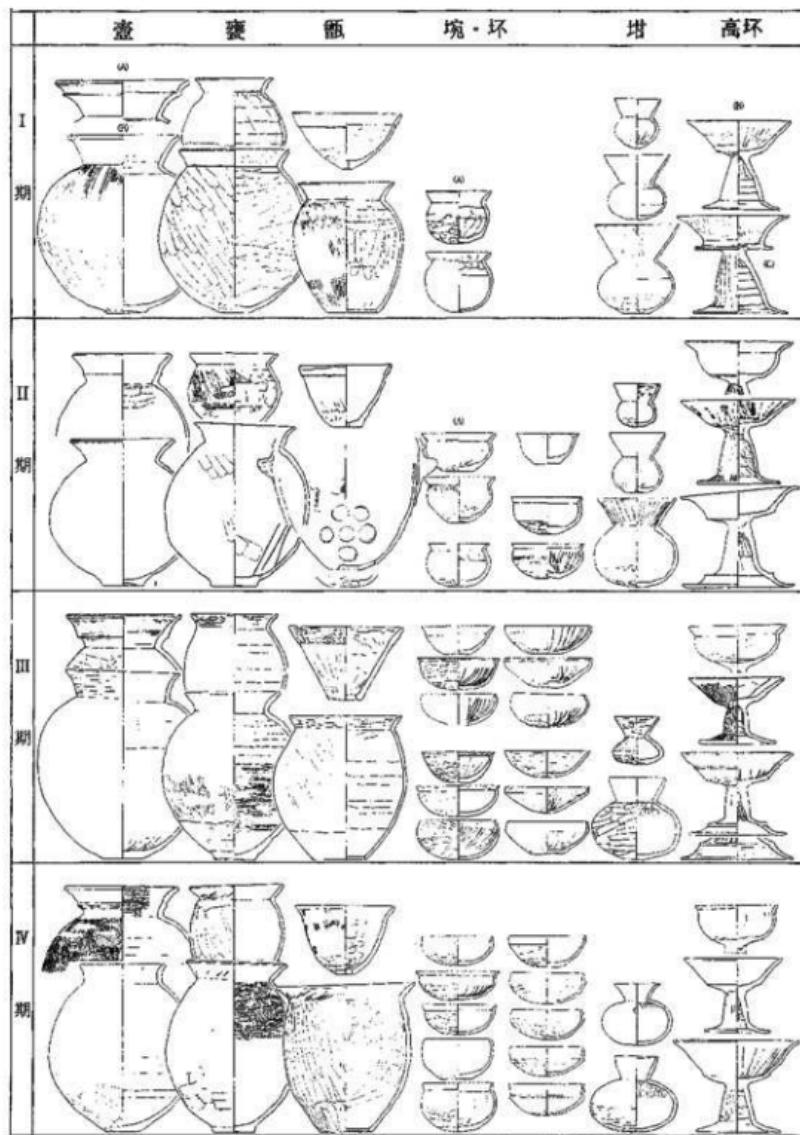
壺は口縁部が短くなる。口縁部と胴部の径は、ほぼ等しくなる。高杯Aが出現する。高杯Bは、積み上げ痕跡を残すものが多い。また、短脚化の兆しが窺える。高杯Cは杯底部が水平方向に延び、脚部の突帯は明瞭に突出する。また杯口径より脚径の方が大きいものがある。

III期：諏訪遺跡49号住居跡(柿沼1979)・二本松遺跡6号住居跡・西富田遺跡第7号住居跡・東五十子遺跡第8号住居跡(水島1976)

壺Aは、I期と同様である。壺Bは、口縁部が上方に立ち上がり、口唇部も丸くなる。大形壺は、長胴化はじめる。小形瓶は、該期以降單孔のものに統一される。椀Cは口縁部が開く。椀Dは、次期以降器高を減じるのに対し、該期に出現する椀Eは、器高が深くなりながら変遷する。杯A・Bが出現する(『宇佐久保遺跡』(中村1979)では、和泉期の椀の器高が低くなつて杯形化したもの、ないし、須恵器杯の影響が予想されるにも拘わらず明瞭な模倣杯とならないものを総称して「源初杯」と命名した)。椀・杯は、丸底のものが主流を占める。壺は口縁部が短くなり、胴部は扁平となる。最大径は胴部に移行する。高杯Aは、杯部の器高が高くなる。高杯Bは、脚内面の積み上げ痕跡は残るが筒部が膨らみ、裾部の屈曲は強くなる。高杯Cは、筒部と裾部の段が徐々に弱くなる。

IV期：下田遺跡第24号住居跡(柿沼1979)・諏訪遺跡第45・46・48号住居跡(柿沼1979)

壺Aは、前時期と同様である。壺Bは、口縁部が上方に立ち上がり、口唇部は丸い。大形壺は明瞭に長胴化はじめる。小形瓶は、立ち上がり角度が強くなる。大形瓶は、口縁部と胴部の径が等しくなり、定型化していく。椀Dは浅く、椀Eは深く器高が変化する。明瞭な模倣杯(杯C)が出現する。壺はますます扁平になり、口縁部は短く上方に立ち上がる。高杯Aは、杯部の器高が深くなる。高杯Bは、脚内面の積み上げ痕跡は認められなくなり、脚は短くなる傾向にある。高杯Cは脚部の段が形骸化して沈線で表現されるようになる。



第1図 埼玉県児玉地域の土器編年（5世紀代）

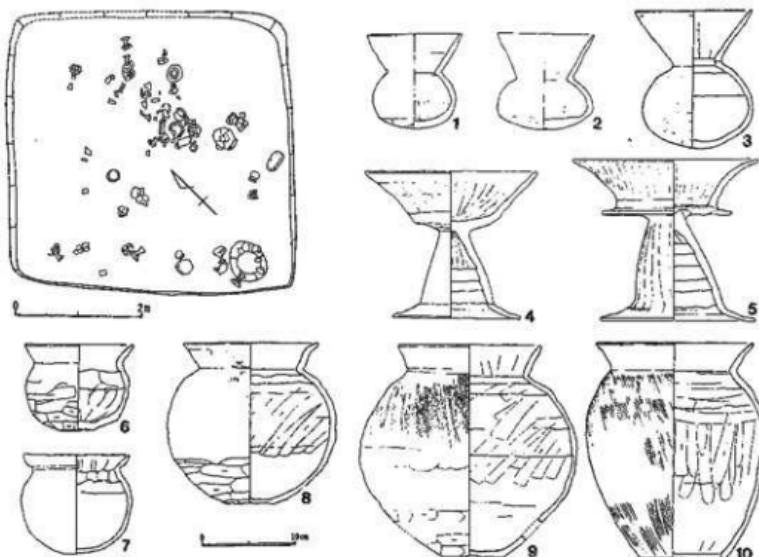
### c. 年代観

以上、Ⅰ期→Ⅱ期→Ⅲ期→Ⅳ期まで編年してきたが、これは「Ⅲ期以降は拙稿(中村1979)及び利根川編年(利根川1982)と一致する。利根川は5世紀中葉須恵器生産開始説である田辺昭三の年代観(田辺1981)を遵守している。いっぽう最近では、都出比呂志(都出1982)・白石大一郎(白石1985)によって須恵器の生産開始時期を4世紀末から5世紀初頭に遡らせる説が提出されている。この年代観を基にして比田井克仁『南関東五世紀土器考』(比田井1988)、坂口一・『東国須恵器の一様相』(坂口1988)によって該期の編年が詳しく、体系的に述べられている。両者の目的は共に違うが、結果として5世紀を4段階に区分し、「各段階」・「各期」は1/4半世紀で均等されている。実年代については、今後の検証を持たなければならないが、拙稿を含めた4氏の各段階の土器の平行関係は、細部については齟齬をきたしているが、概ね一致しているので、この細分案に沿って以下論を進めていきたい。年代については、都出・白石説に準拠したい。また、初期須恵器については『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』(千曲用水系古代文化研究所1987)に網羅的に集成されているので、これを参考としたい。

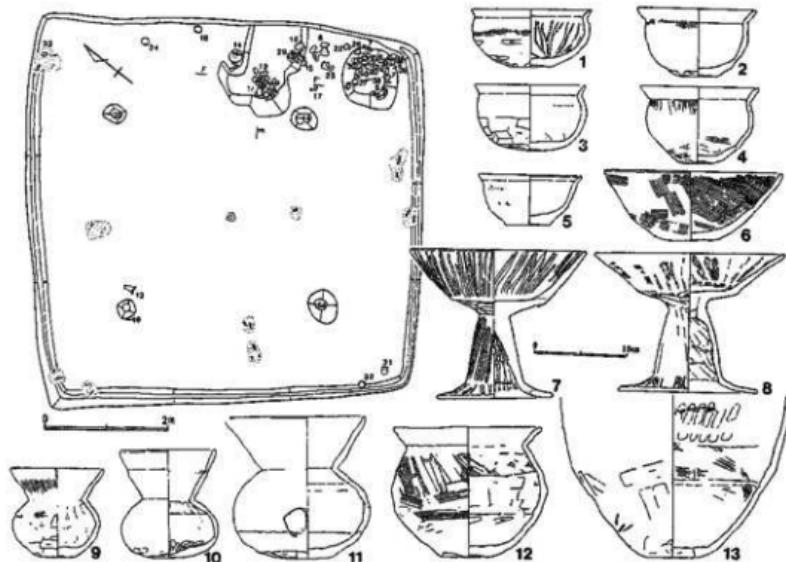
### 3. 各地方の様相

#### a. 芦王地域(第2・3・4図)

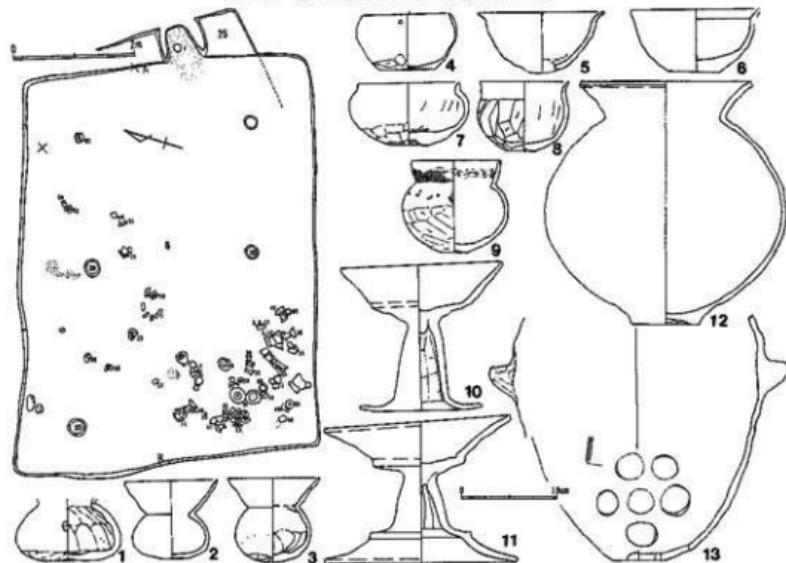
編年については、前項で示したとおりである。竈はⅡ期の神訪遺跡30・32号住居跡(小久保1979)、古川遺跡22号住居跡(小久保1978)に認められ、該期以降ほぼ普遍的に普及している。須恵器は



第2図 愛宕遺跡第3号住居跡出土土器



第3図 諏訪遺跡第32号住居跡出土土器



第4図 古川端遺跡第8号住居跡出土土器

TK73が美里町植之口遺跡(駒宮1987)・同村後B遺跡(駒宮1987)から出土している。大形瓶は、Ⅰ期の愛宕遺跡(駒宮1976)で認められる。

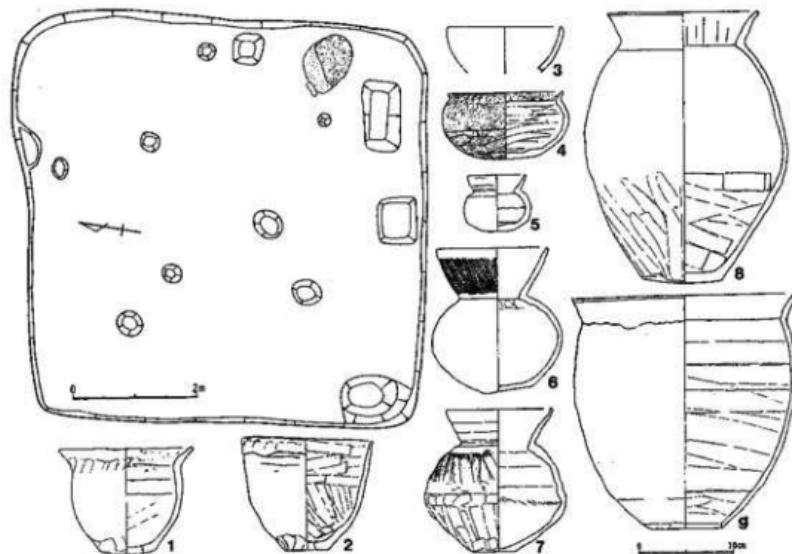
b. 比企地域 (第5・6・7図)

江南町塩前遺跡第1号住居跡(新井1982)、東松山市駒堀遺跡第4・10号住居跡(今泉1974)、同舞台遺跡第4号住居跡(谷井1974)が挙げられる。塩前遺跡は壇・高杯からⅡ期に比定できる。駒堀遺跡では、該期の住居跡7軒のうち2軒に壇、その他はかが施設されている。まず駒堀遺跡について説明しておきたい。杯形土器は源初杯が特徴的にみられるが、初期的な模倣杯も散見される。小形丸底壺形土器は口縁部の比較的短い新しいものが見られる。同様に壺形土器も長脚化したものが見られる。

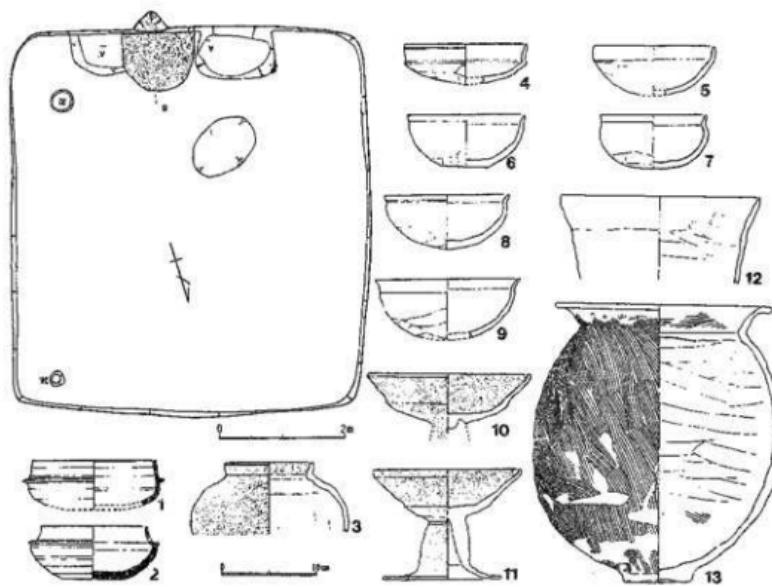
壺はⅢ期の塩前遺跡で出現している。しかし、Ⅲ期の駒堀第4号住居跡では、初期的なもので壁に煙道が届いていない。同期の駒堀第10号住居跡では比較的定型化している。しかし、嵐山町行司免遺跡(植木1988)でも炉から壺移行期(Ⅳ期)の住居跡が数軒検出されているが、該期においても壺は普遍的な存在とはなっていない。また、模倣杯の存在も極めて希薄である。須恵器はTK216～TK208段階のものが舞台遺跡第4号住居跡から出土している。大里村舟木遺跡では、TK216段階のものが出土している。大形瓶はⅢ期の駒堀遺跡第4号住居跡で確認されている。

c. 人間地域 (第8図)

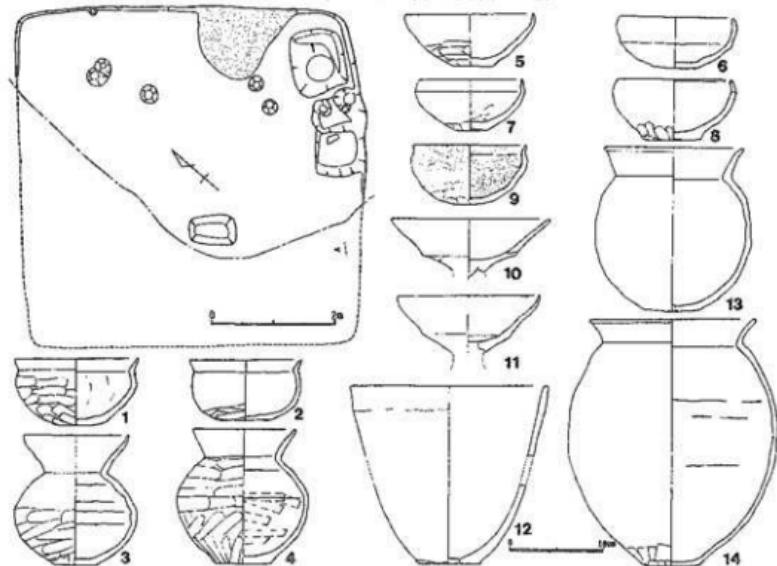
富士見市打越遺跡(会田1978)が挙げられる。打越遺跡では19軒の住居跡が検出されたが、出土



第5図 舞台遺跡第4号住居跡出土土器



第6図 舞台遺跡第4号住居跡出土土器



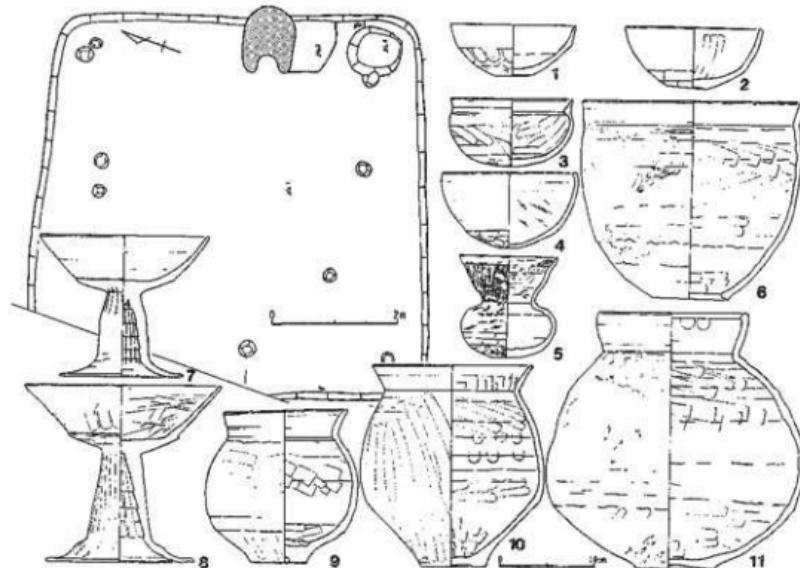
第7図 駒堀遺跡第10号住居跡出土土器

遺物の不明な16号住居跡・17号住居跡が重複するのを除き、その他はほぼ同時期である。なお、基本的には殆どの住居に竈を有する。まず、杯形土器についてみると楕円形土器についてみると楕形土器との区別が不明瞭なものがある。これらは殆ど丸底化しており、完全に杯形を呈するものと共に伴する。また11号住居跡では源打杯、19号住居跡では模倣杯Bも認められる。小形丸底壺形土器は口縁部が短く、胴部は扁平である。なお、須恵器壺を模倣した小形丸底壺の胴部を穿孔したものもある。高杯形土器は短脚であり、胴部内面は範削り調整し積み上げ痕を残さない。壺形土器は、胴部に刷毛目を残し古い様相を呈するものもある。しかし、刷毛目を残さず長胴化の兆しも僅かに窺えるものもある。壺形土器は複合口縁を呈する古い要素を残すものは認められない。また壺形土器は大形、長胴化している。これらの時期は、Ⅳ期に比定されるものと思われる。杯形土器、壺形土器の大部分が第Ⅰ・Ⅱ期のものと類似するが、高杯形土器・壺形土器・瓶形土器から勘案すれば、該期に比定するのが適当であろう。

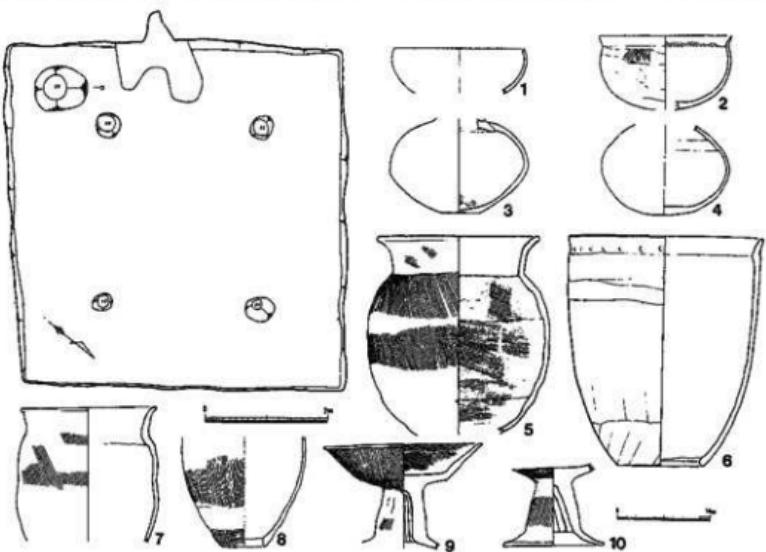
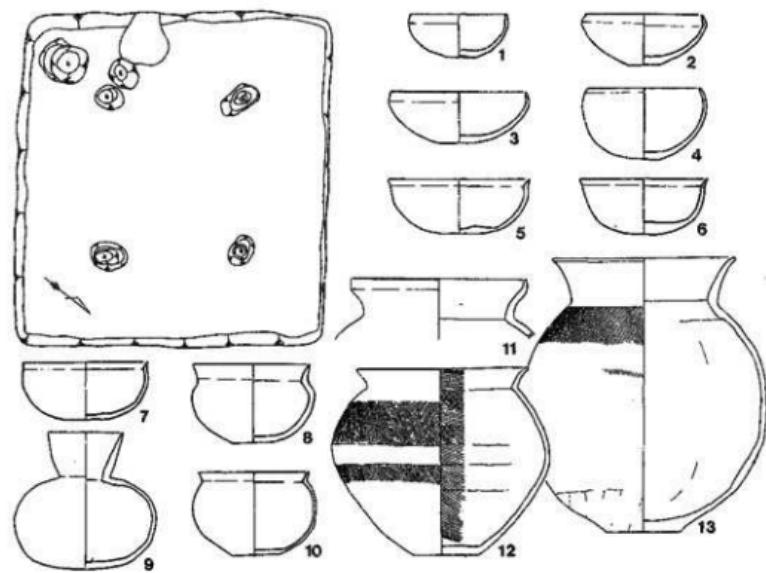
すなわち、竈はⅣ期に出現する。須恵器は、川越市御伊勢原遺跡でTK216段階のものが出土している。大形壺も現時点ではⅣ期になってからである。

#### d. 埼玉地域（第9・10図）

行田市武良内遺跡第1・2号住居跡（金子1977）、高畠遺跡第1号住居跡（金子1977）、弥藤吾新田遺跡第5号住居跡（田部井1976）が挙げられる。武良内遺跡第2号住居跡は竈の施設が不明であるが、同時期と考えられる第1号住居跡では竈をもっているので、前者にも存在していた可能性が高い。



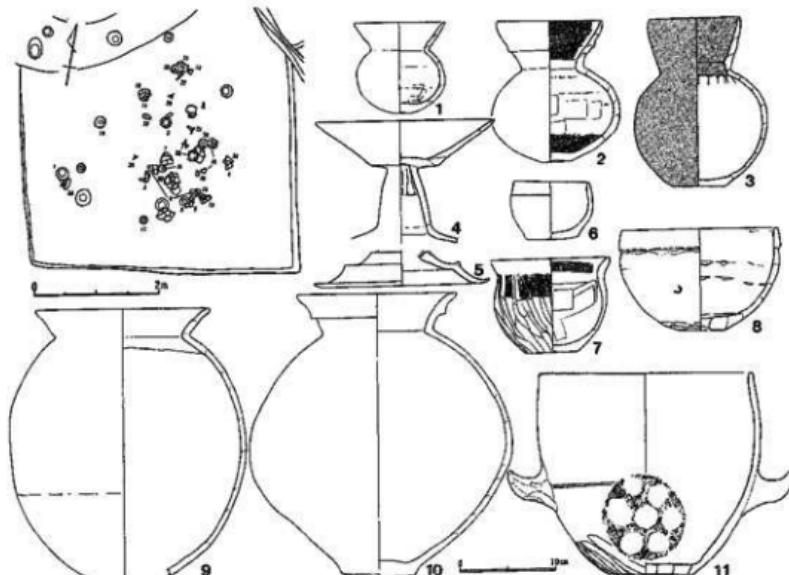
第8図 弥藤吾新田遺跡第5号住居跡出土土器



第9図 打越遺跡第1(上)・7(下)号住居跡出土土器

杯形土器は、弥藤吾新田遺跡で源初杯が一例見られるのみである。椀形土器は弥藤吾新田遺跡、武良内遺跡1・2号住居で僅かに認められるのみである。杯形土器の器形は多様であり、底部は丸底と平底の両者がある。小形丸底椀形土器は、弥藤吾新田遺跡と武良内遺跡では形態が異なる。前者は口縁部が長く、胴部は扁平である。両者の最大径は、ほぼ等しい。これに対し、後者は口縁部が短く、胴部は球形を呈する。また、武良内遺跡一例は口縁部と胴部の最大径がほぼ等しいが、その他は胴部に最大径がある。高杯形土器は脚部が長く、脚部内面に積み上げ痕を残し、頂部にヘソを有し杯部の深い弥藤吾新田遺跡例と脚部が前者よりも開き、かつ短く、脚部内面を調整して積み上げ痕を消し、杯部の浅い武良内遺跡例の二者がある。後者には、段付高杯が共伴する。壺形土器は長胴化の兆しの窺えるものもあるが、殆どは球形を呈する。刷毛目を残すものは認められない。壺形土器は明瞭に複合口縁となるものがあり、口縁部外縁の稜は強い。大形壺形土器は長胴化も器形の齊一性が見られない。武良内遺跡の大形甌は、須恵器甌を即時に模倣したものとして注目される。上述したように武良内遺跡と弥藤吾新田遺跡の土器の様相は相違する。前者は杯形土器の出現以前、壺形土器の球胴化などの様相からⅡ期に比定できそうである。後者は杯形土器が模倣杯Aの範疇で捉えられ、他の器種に比して相対的に新しい様相を呈する。しかし、長脚で脚部内面に積み上げ痕を残し、ヘソが突出する高杯形土器、及び小形壺形土器の特徴からⅡ・Ⅲ期に比定される。

甌はⅡ(Ⅲ)期の弥藤吾新田遺跡、須恵器はTK23段階のものが熊谷市鎧塚古墳から出土している。大形甌はⅡ期の武良内遺跡で確認されてる。



第10図 武良内遺跡第2号住居跡出土土器

#### e. 大宮地域（第II・III回）

松伏町前田遺跡（横川1965）、桶川市高井遺跡（吉川1969）、同高井北遺跡（吉川1976）、伊奈町大山遺跡A区34号住居跡（今泉1979）が挙げられる。これらの遺跡では、総計11軒の該期の住居跡が検出されているが、竈をもつのは前田遺跡3号住居跡、高井遺跡21号住居跡、高井北遺跡9号住居跡、大山遺跡A区34号住居跡の4軒である。このうち前田遺跡4号住居跡では竈が壁から離れた特異なものである。また大山遺跡A区34号住居跡を除く2例の竈は貧弱なものである。

杯形土器は橢形土器と区別するのが困難なものが多く、殆どが源初期である。しかし中には前田遺跡3号住居跡、高井北遺跡9号住居跡例、大山遺跡A区34号住居跡例のように、口縁部と体部を区別した広義の模倣杯Aも共伴する。橢形土器は殆どが丸底で器高が比較的浅く、口縁部が短く外反するものである。小形丸底埴形土器は、口縁部が短く内湾しながら立ち上がる。胴部は扁平となり、最大径を有する。高杯形土器は、脚部の短脚化が進み裾部は屈曲して広がる。脚部内面はヘソも含めて調整される。また杯部と脚部の接合にヘソを用いない、新たな接合方法によると思われるもの（高井遺跡1号住居跡例）も認められる。変形土器は高井遺跡21号住居跡出土例のように例外的には刷毛目を残すものがある。しかし一般的には不明瞭な箇削りによるもので、長脚化の傾向が顕著に窺える。壺形土器は良好な資料に恵まれないが、複合口縁を呈するものは見られないと思われる。壺形土器は古い要素である中央孔のものが見られるが器形は既に長脚化している。

これら4遺跡は大山遺跡A区34号住居跡が若干新しくなる可能性を有するが、ほぼ同時期として捉えることができる。III・IV期に比定される。すなわち、竈・大形瓶の出現はⅢ期以降、須恵器はT K 208-T K 23段階のものが、浦和市白鍬遺跡・与野市殿ノ前遺跡・越谷市見田方遺跡などの祭祀的な遺跡から出土している。

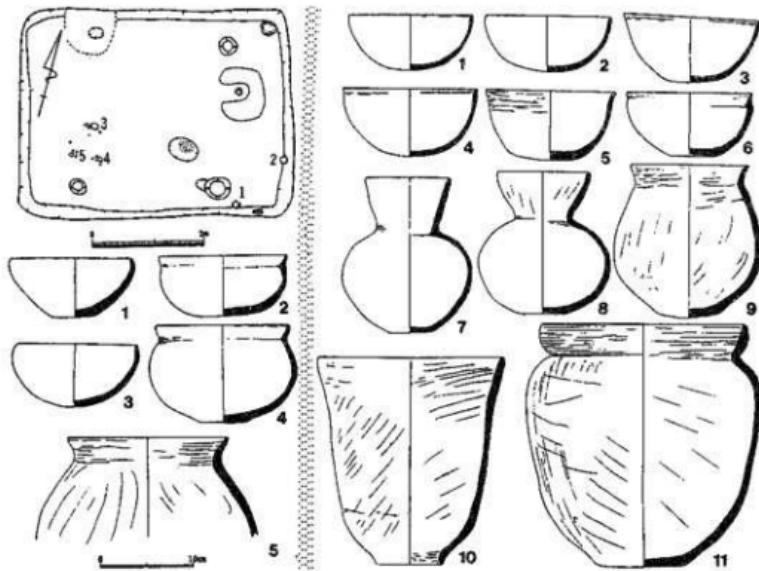
#### f. 秩父地域

該期の遺跡は、確認されていない。

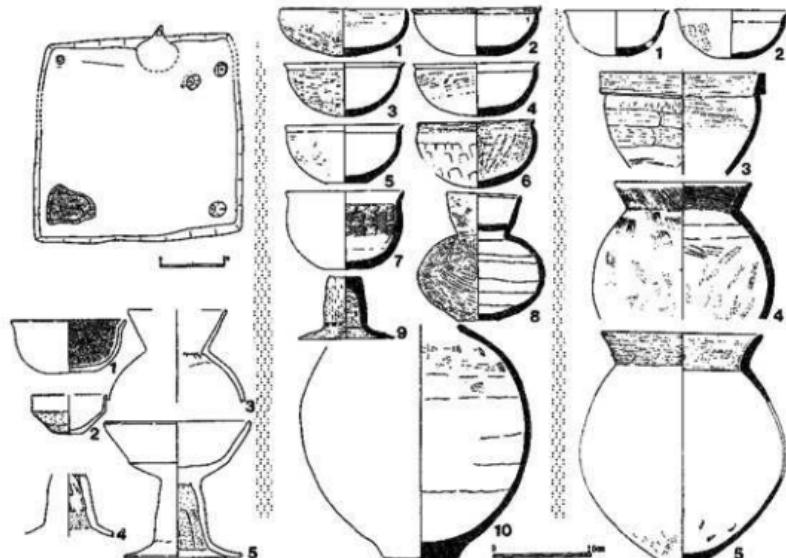
以上、県内の竈・須恵器・大形瓶の出現について地域毎に検討してきた。その結果をまとめよう。まず、I期には竈を出現させた地域はないが、児玉地域では大形瓶が認められる。II期になると、児玉地域・埼玉地域で竈・大形瓶が認められる。また、比企地域でも突発的には認められる。III期になると比企地域・大宮地域で竈・大形瓶が認められる。IV期になると入間地域で竈・大形瓶が認められる。ただ、児玉地域・埼玉地域を除く地域では、III・IV期になってしまって総ての住居跡にまで竈は普及していない。

## 2. 関東地方

北関東については、坂口一「東国須恵器の一様相」（坂口1988）の研究成果がある。群馬県については、田口一郎「古式須恵器をめぐる諸問題」（田口1987）と題した発表に依拠したい。坂口の編年もこれに準拠しているものと思われる。南関東については、比田井克仁「南関東五世紀土器考」（比田井1988）がある。これらの成果を参考にして、以下記していく。坂口・比田井の編年觀は、5世紀を四期区分している。しかし、坂口案は比田井及び拙稿と相違する。坂口編年の『埼玉』を基軸にして、各県の各段階はおよそ一時期なし僅かに新しくなるものと考えられる。その点、拙



第11図 前田遺跡第3(左)住居跡・A地点(右)出土土器



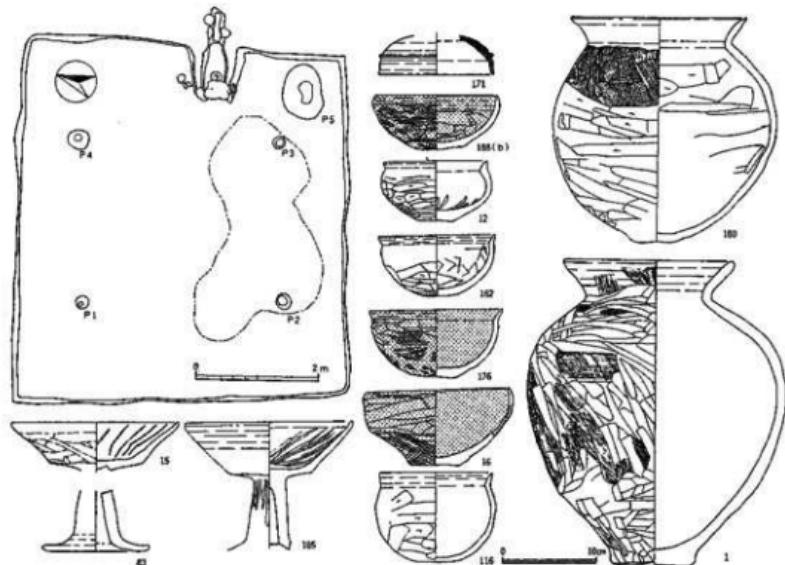
第12図 高井北遺跡第9号住居跡(左)・高井遺跡第1(中)・2(右)号住居跡出土土器

考と比田井の見解は概ね一致している。しかし、これは坂口の見解が誤っているというのではなくて、縦年目的と時間幅の認識の相違に起因しているということを断っておきたい。ここでは、本稿の時期区分に修正して記していきたい。

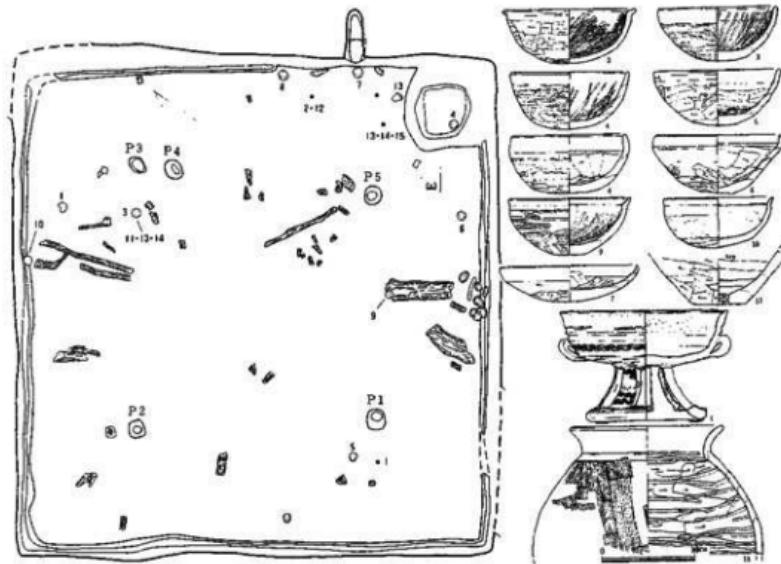
a. 群馬県（第13・14図）

竈・大形瓶は、Ⅱ期の前橋市小神明湯気遺跡第26号住居跡（井野1986）に初現をみる。Ⅲ期になると荒砥北原遺跡第7号住居跡（石坂1986）を代表として群馬町熊野堂遺跡（井川1984）、同三ツ寺Ⅲ遺跡（井川1985）、藤岡市温井遺跡（真下1981）、富岡市内匠遺跡（井上1982）が挙げられ、基本的に竈の住居跡に竈が施設される。これらは茂木由行が「群馬県における鬼高式土器の縦年」（茂木1984）で示した『第Ⅰ期』に相当するもので、本稿のⅢ～Ⅳ期に対応する。

内匠遺跡第2号住居跡、温井遺跡第5・25号住居跡の變形上器、大形瓶形土器は長胴化の割合が少ない。楕形土器Aは器高が高く、また模倣杯Aが伴出する。これらはⅢ～Ⅳ期に対応する。また、三ツ寺Ⅲ遺跡では「第1・2分類期」を相当するが、時期は若干新しくなる。變形土器、大形瓶形土器はすでに長胴化している。楕形土器Aは源初杯に変化し、楕形土器B、模倣杯Cも出現している。これらはⅣ期、ないしそれ以降に併行する。確認しておけば竈・大形瓶は、Ⅱ期に出現する。須恵器はT K 73段階の小形壺が新里村峯岸遺跡第1号古墳、蓋が前橋市小明神湯気遺跡26号住居跡から出土しているが、後者は一段新しくなる可能性がある。なお、T K 23以前の須恵器窯の存在が想定されている（田口1987）。



第13図 小神明湯気遺跡第26号住居跡出土土器



第14図 荒砥北原遺跡第7号住居跡出土土器

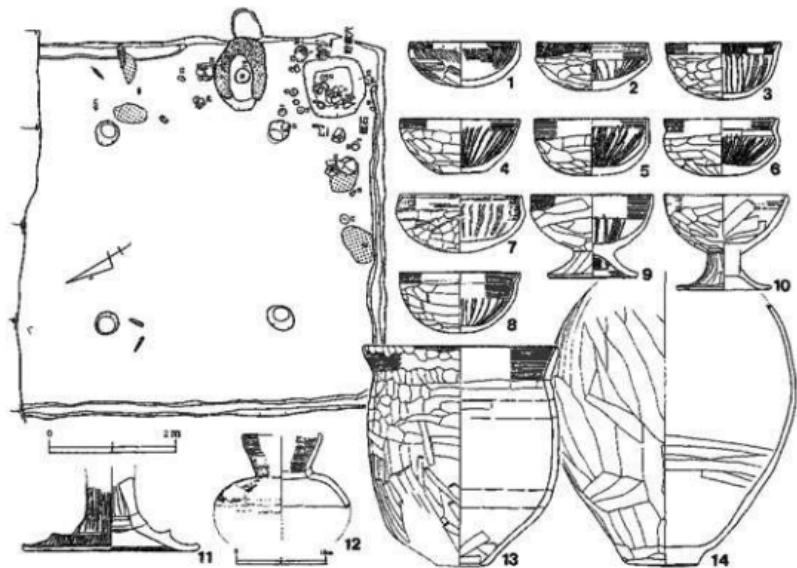
b. 栃木県（第15図）

野木町篠山遺跡（山崎1974）、宇都宮市権現山北遺跡（大島1979）、小山市喜沢海道間遺跡（野口1986）、岩舟町赤羽根遺跡（田代1984）がある。篠山遺跡では竈を持つ住居跡が1軒検出されており、時期は、Ⅳ期以降に比定される。権現山北遺跡（大島1979）では和泉期終末の住居跡が8（7）軒検出されているが、該期の住居跡に竈の施設されるものはない。これらの遺物には若干の時期差は認められるが、およそ同時存在の住居跡であろう。代表的な5号住居跡、あるいは若干新しくなる7号住居跡であってもⅢ期をさかのばらない。これに続く鬼高期の住居跡に、第9・16号住居跡の2軒が挙げられる（大島1979）。これらは共に竈を持つものであり、Ⅳ期ないしそれ以降に比定される。赤羽根遺跡でも竈が出現するのはⅢ～Ⅳ期からであるが、須恵器はⅡ期、大形甌はⅣ期から共伴する。

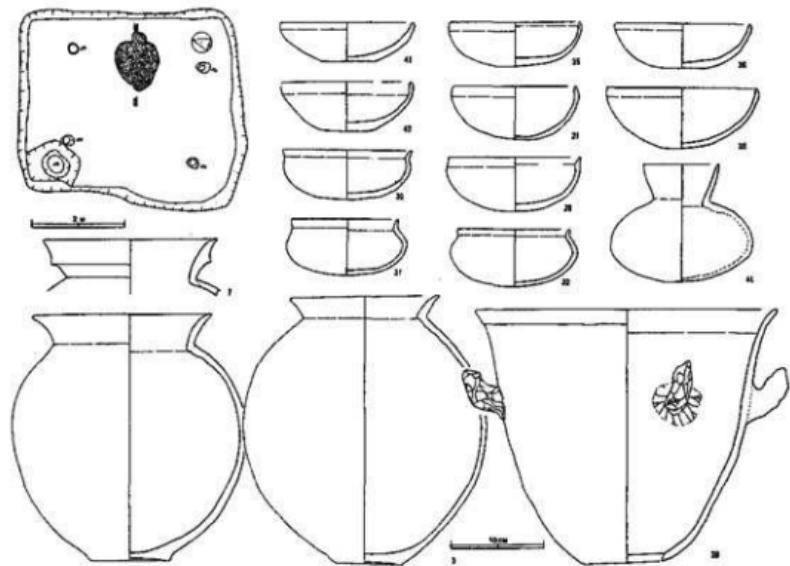
竈の出現は、古くみてもⅢ期の赤羽遺跡第4号住居跡、喜沢海道間遺跡第8号住居跡、県央の権現山北遺跡ではⅣ期を俟たなければならぬ。須恵器は、TK73段階の杯が権現山遺跡第2号住居跡から出土している。大形甌はⅢ期の権現山北遺跡第7号住居跡で確認され、竈導入時期ないし直前に存在している。

c. 埼玉県（第16図）

千代田村上稻吉西原A・B遺跡・同中佐谷A・B遺跡・同志筑遺跡（山本1980）、石岡市新池台遺跡（和田1983）、東海村小沢野遺跡（茂木1977・84）がある。志筑遺跡第24号住居跡では炉の一端が突



第15図 赤羽根遺跡第4号住居跡出土土器

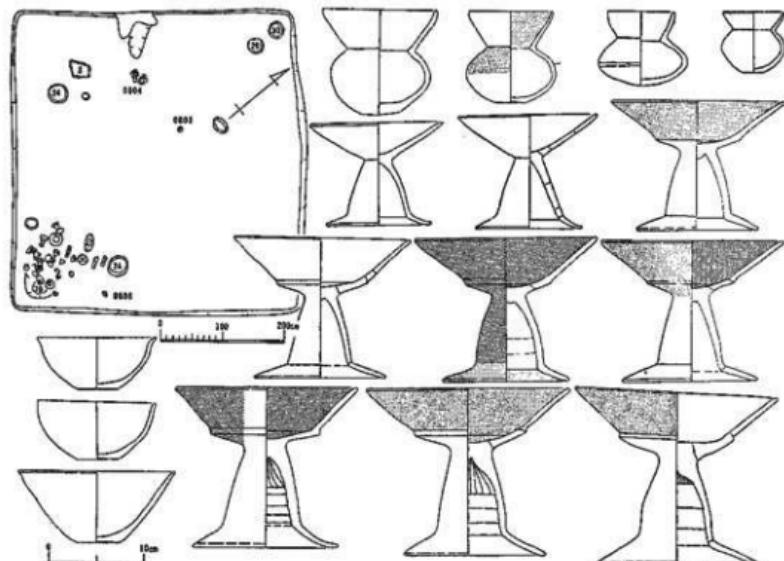


第16図 志筑遺跡第23号住居跡出土土器

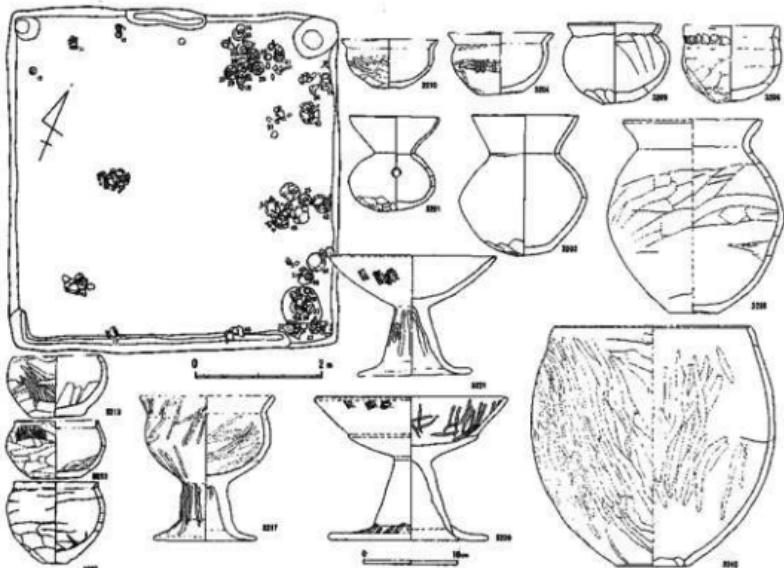
出し、竈への試行傾向が伺える。同期の第26号住居跡では、竈が存在している。時期は、Ⅳ期である。稚敷郡桜川村宮ノ脇遺跡は祭祀遺跡であるが6世紀前半になっても竈を持たない住居跡がある。資料的な制約があり詳細に検討することはできないが、竈・大形瓶の出現は、Ⅲ期以降に遅れる可能性が極めて高い。

d. 千葉県（第17図）

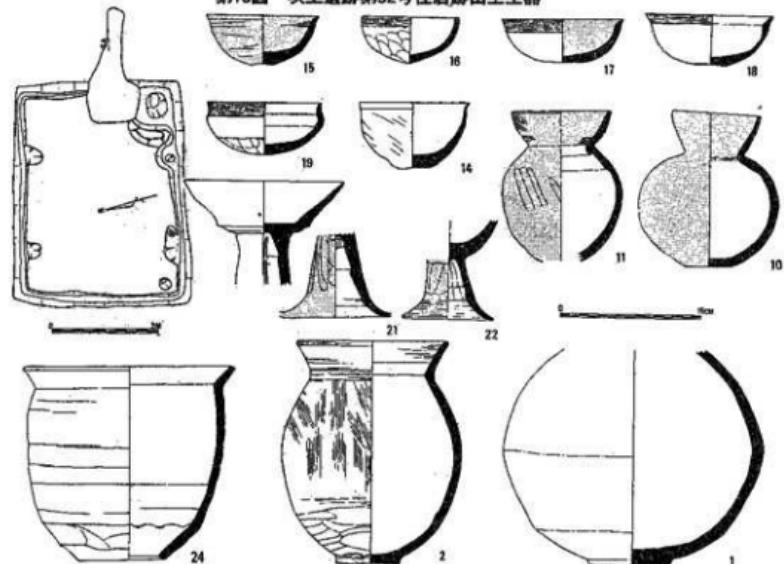
竈の施設は船橋市外原遺跡第8号住居跡（松浦1972）に初現みる。竈出現期の問題を考える前に該期（和泉・鬼高期）の土器編年について、日本考古学研究所の一連の研究がある（村山1981・1982a・b・柿沼1982）ので、ここではこの成果を基にして検討してみたい。これによれば竈の出現をもって和泉期と鬼高期を区分している。まず、和泉期（村山1982b）について紹介しておきたい。該期は三時期に区分される。各時期の特徴を概観すると「和泉第Ⅰ期」は焼成後の穿孔ではあるが竈が存在する。「和泉第Ⅱ期」は焼成前穿孔の竈、及び初源杯・模倣杯Aが出現する。「和泉第Ⅲ期」は大形瓶の出現、杯類の出土量が非常に増えてくる。そして、鬼高期（村山1982a）になると竈が施設されるが、「鬼高第Ⅰ期」の土器の様相は和泉期と酷似する。「鬼高第Ⅱ期」には模倣杯C・Dやその他の型の模倣杯も出現し、さらに大形瓶の出土量も増える。「和泉第Ⅰ期」から「鬼高第Ⅱ期」までの5段階を本稿の時期に比定すると、「和泉第Ⅰ期」がⅠ～Ⅱ期、「和泉第Ⅱ期」がⅡ～Ⅲ期、「和泉第Ⅲ期・鬼高第Ⅰ期」がⅢ～Ⅳ期、「鬼高第Ⅱ期」は第V以降に対応する。なお、村山と比田井の見解は大きく相違する。



第17図 外原遺跡第8号住居跡出土土器



第18図 吹上遺跡第32号住居跡出土土器



第19図 東原遺跡B区第5号住居跡出土土器

比田井によれば、外原遺跡第8号住居跡は「II段階」に比定される。しかし、他の同時期の住居跡において竈の存在は認められない。該期では、基本的に竈が施設されないと言う状況は他の遺跡においても肯定される。竈の施設が自生的でないとすれば、II期には既にその存在を知っていたと言うことになる。しかし、普遍的な存在として竈が普及するのはIII・IV期、恐らくIV期を待たなければならぬ。須恵器はTK208段階のものが、佐倉市大篠塚遺跡(栗本1970)で確認されている。大形甌は、比田井が指摘するように「IV段階」に出現する。

#### e. 東京都

竈が出現するのは、IV期の八王子市中田遺跡E地区2・19住居跡からである。大形甌はII期の日野市吹上遺跡第32号住居跡(清野1979)で出土している。最古の須恵器はTK73段の甌が、板橋区早瀬前遺跡(守屋1987)で確認されている。

#### f. 神奈川県

竈は「I・II段階」では存在しないが、「III・IV段階」の秦野市根丸島遺跡では未報告のため検討することができない。IV期の横浜市東原遺跡B区3・5号住居跡(須山1972)では、竈・大形甌が存在している。須恵器はTK73段階のものが横浜市矢崎山遺跡、TK216段階のものが根丸島遺跡では出土しているという。

関東各都県における竈・大形甌・須恵器の出現時期差についてまとめておきたい。竈はII期に群馬県・埼玉県(千葉県)、III期に栃木県、IV期に茨城県・千葉県・東京都で出現する。千葉県のII期の竈は突発的なものであり、ある程度普遍的な存在となるのはIV期になってからである。大形甌はI期の埼玉県、II期の群馬県・東京都、III期に栃木県、IV期に茨城県・千葉県でみられる。須恵器については、TK73段階のものは千葉県・茨城県を除く各都県で確認されている。残存・伝世の問題はあるにしろ、TK73段階がI期におおよそ比定されることは間違いない。

### 3. 竈・大形甌・須恵器

#### a. 竈

竈の出現については、種々論議されている。その経緯については、笠森健一(笠森1978)、横川好富(横川1987)、岩松保(岩松1987)によって、それぞれまとめられている。竈を大陸から伝來したとする大場磐雄の大陸伝来说(大場1955)、須恵器窯の影響を受けて独自に出現したという大川清の在地発生説(大川1955)が基幹にあり、共に国際的視点にたった見解である。一方、石野博信は「カマドの発生は、弥生時代後期の類カマドから近畿地方において漸移的に形成された」(石野1975)として在地発生説をとっている。

その後、竈出現の視点は国内の問題として論議されるようになる。しかし、以下の大陸伝来说が直接的なものか、畿内を経由しての間接的な影響なのか論議されることはないが、後者の意図に沿って展開しているようである。特に、東国に出現した竈の経緯が問題にされた。横川好富は、大陸の影響により関東地方の一地域に出現したもののが各地に分散していったと考えた(横川1968)。高橋一夫は、竈は熱処理方法の発展によって炉から転化したもので関東地方で多元的に発生したと考えた(高橋1975)が、その後自説を微回しているようである。また、井上尚明は初期竈を「C類(知識と

して認識)』、『B類(具体的なモデルを認識)』、『A類(構造を把握)』に分類した。これらは順次展開することから竈は完成された形で伝来したものではないとしたが、やはりその契機に関しては伝来説を踏襲している(井上1986)。いっぽう、藤田至希子は構造物としては、確認できていない古墳時代前期に竈の使用痕跡の復元から間接的に『竈』の存在を想定している(藤田1986)。井上のいう天井部の存在しない『竈(B・C類)』と同様な想定をしている。畿内における古墳時代前期の竈の使用痕跡は、底部から加熱されており、なおかつ、口縁部まで煤けていることから吊り下げる方法(『浮置A方式』)を想定したことがある(中村1987)。しかし、炉の構造の変化も考慮しなければならないかも知れない。私も把手を持つ大形甌が須恵器・韓式土器の影響を受けて出現したものであり、この大形甌と不可分の関係にある竈もまた、大陸の影響であるという大陸伝説を唱えたことがある(中村1982)。現在、竈の出現は大陸伝説が定説となりつつあるし、私も賛同するものである。しかし、石野博信の『類カマド』(石野1975)、藤田至希子の『煮沸形態Ⅱ(古墳時代前期)』(藤田1986)、井上尚明の竈『B・C類』(井上1986)の想定から竈の在地発生説的見解を今一度検討し、在地の主体的動態を把握する必要があるのではないかだろうか。

ところで、前節で検討したように関東地方に竈が出現したのは、Ⅱ期の群馬県小神明湯気遺跡・埼玉県諏訪遺跡であるという結論に達した。土器から見るかぎり後者が相対的に新しいが、ほぼ同時期として捉えられる。小神明湯気遺跡第26号住居跡では、竈構造が整っているのに対し、後者の諏訪遺跡第32号住居跡では primitive な形態である。つまり、仮に primitive な竈が群馬県にも存在するとすれば、最古の地位はより不動のものとなる。東日本最大の古墳や多数の豪族居館を有し、畿内に対峙した毛野政権を擁する群馬県に最古の竈が存在することは、竈出現の意味を考える上で極めて示唆的である。結論を急げば、竈は完成されたものとして後の東山道経由で毛野に導入されたと考えたい。そしてその影響を受けて、北武藏やその他の地方に伝播したものであろう。そのために東国における竈は、大きな地域間で比較した場合 primitive なものがより古いとは言えない可能性がある。なお、千葉県外原遺跡でも該期の竈が見られるが、その後継続して展開していくので、突発的なものと捉えておきたい。

また、東北地方に目を転じると宮城県岩切鴻ノ巣遺跡(白鳥1974)、福島県佐平林遺跡(大越1980)が竈出現期の遺跡である。前者は遺物と住居跡の関係が不詳であるが、遅くとも 6 世紀前半には比定されよう。

#### b. 大形甌 (第19・20・21・22・23図)

大形甌は竈との関連が密接であり、両者は不可分の関係にある。それでも、大形甌はモノとして移動が可能であるのに対し、竈の構築は技術を要するために前者が先行して出現する場合が多い。この現象は、埼玉県児玉地方や東京都などでみられるが、さほど重要な事象ではない。ここでは、竈出現の最も早い埼玉県北部の愛宕遺跡でⅠ期の大形甌が検出されていることを確認しておきたい。

大形甌は須恵器・朝鮮半島系土器の模倣形態として普及・発展していった。半島で通有な土器に把手を付ける形態は、大形甌にそのまま継承された。汎日本的な傾向である。これらの形態には、口縁部が外反する『甌1型』と口縁部が直上する『甌2型』がある(第21図)。大形甌は、これらの模倣形態として展開している訳であるが、地域や時期によって形態が異なっている。拙稿『大形甌』(中

	把手を持たないもの(A)		把手を持つもの(B)	
	膨むもの(a)	膨まないもの(b)	膨むもの(a)	膨まないもの(b)
I (壺型)				
				
II (甌型)				
				
III (甑1型)				
				
IV (甑2型)				
				
V (中田型)				
				

第20図 大形甌の型分類

村1982)を基にして、以下述べていきたい。  
分類 (第20図)

I型、口縁部は屈曲して外反し、最大径は球形の胴部にもち、壺型を呈するもの。

II型、口縁部は屈曲して外反し、最大径を口縁部にもつか、あるいは胴部とほぼ等しいもの。

III型、口縁部は短く、弱く外反し、最大径を口縁部にもつか、あるいは胴部とほぼ等しいもの。

IV型、口縁部と胴部の区別の無いもの。

V型、口縁部が把厚して外面に積み上げ痕をもつか、あるいは更に弱く外反するもの。

各型は把手の有(B)無(A)、胴部の短(イ)・長(ロ)、胴部の膨らむもの(a)・膨らまないもの(b)などの条件によって細別できる。また、孔の形態について小孔単孔、大孔単孔、大孔多孔、小孔多孔に分類できる。

なお、韓式系土器の

底部は、大孔多孔である。

I型は壺の在地発生説が成立すると仮定すれば、大形瓶も在来の器種の中から生まれることが予想される。本型は、壺出現期の壺(壺と酷似している)に形態が類似している。「知識」として認識した段階に模倣したものであろう。「壺型」と仮称する。II型は、壺の長胴化と歩調を合わせて展開する在地性の強い型である。「壺型」と仮称する。III・IV型のうち、特にIII Bは「壺1型」、IV Bは「壺1型」、IV B Iは「壺2型」を typical に模倣した形態である。V型は、弥生時代の小形壺の特徴である口縁部の肥厚という現象を残存させた形態である。

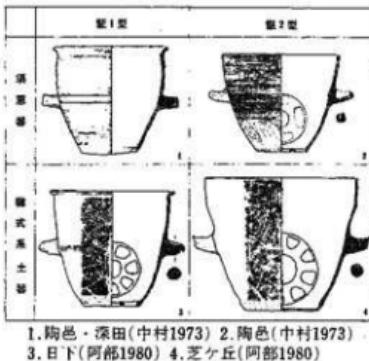
以上の分類を念頭に描き、まず県内の様相を見ていきたい(第23図)。①児玉地域／5世紀代ではI A・II A型が多く、把手をもつものや大孔多孔も二例確認されている。6世紀以降では、II A口

型が典型的な型として展開する。②比企地域／5世紀ではII・III・V型が認められ型が安定していない。特徴的なのは、III・V型の多くに把手(B)を持つものが多いことである。6世紀以降ではII A口が典型となる。③入間地域／5世紀代では、VA型が主流である。④埼玉地域／5世紀代では、IV B I型の「壺2型」を忠実に模倣した資料が特筆される。6世紀以降はII A口が典型的な型として展開する。⑤大宮地域／5世紀代ではIII A口・IV A口があるが、資料が少ない。6世紀以降ではII A口となる。⑥秩父地域／5世紀代は不明であるが、6世紀代ではII A口の他にIV B型も多く認められる。以上が埼玉県内の様相である。

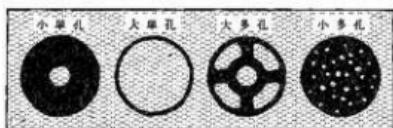
ところで、東日本に大形瓶が波及してきた時点で、大形瓶は把手付であったが、やがてそれを消失する。群馬県・栃木県・埼玉県北部・東京都・神奈川県では、特にその傾向が高い。いっぽう千葉県・茨城県では、把手付大形瓶の散見する頻度が高い。関東地方の大形瓶は型によって、三つの分布圏が認められる。これらの大形瓶のなかには例外も比較的多くみられるが北関東ではII A型、南関東ではVA型、東関東ではIII A型が基本的な型である。そして、北関東と南関東の接する埼玉県比企地方を中心にしてVB型が分布する。東北南部では大形瓶はI型がみられ、なかにはボッチ状の把手もある。なお、西日本では基本的に把手付の大形瓶が分布している。

ところで、大形瓶の把手は故地である朝鮮半島では基本的な形態であるが、その用途は恐らく壳に掛けたまま手は熱くならないで移動させるための機能を持っているのであろう。把手を持たない南関東のVA型大形瓶には、縄竹で覆ったものが東京都船田遺跡(服部1973)に見られ、使用方法を復元するには興味深い事例である。

大形瓶の導入は、(a)米の調理方法を煮る(姫飯)から蒸す(強飯)に替えたと言われる。(b)柿沼幹夫

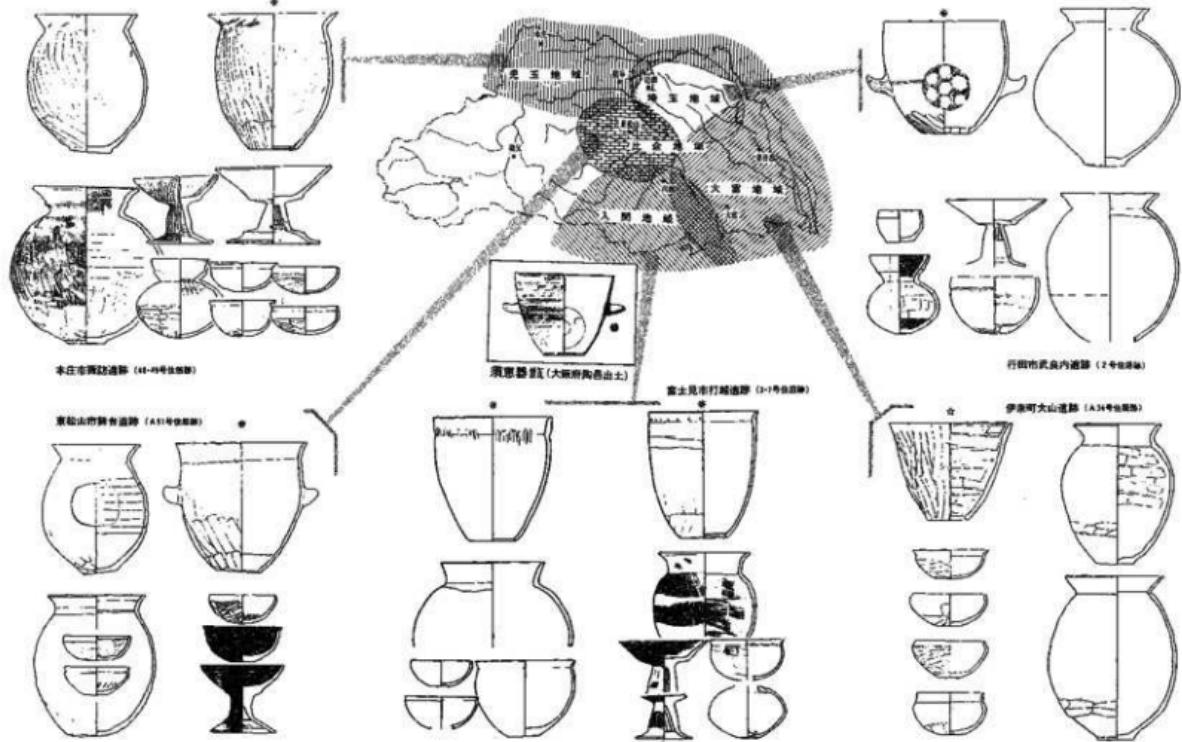


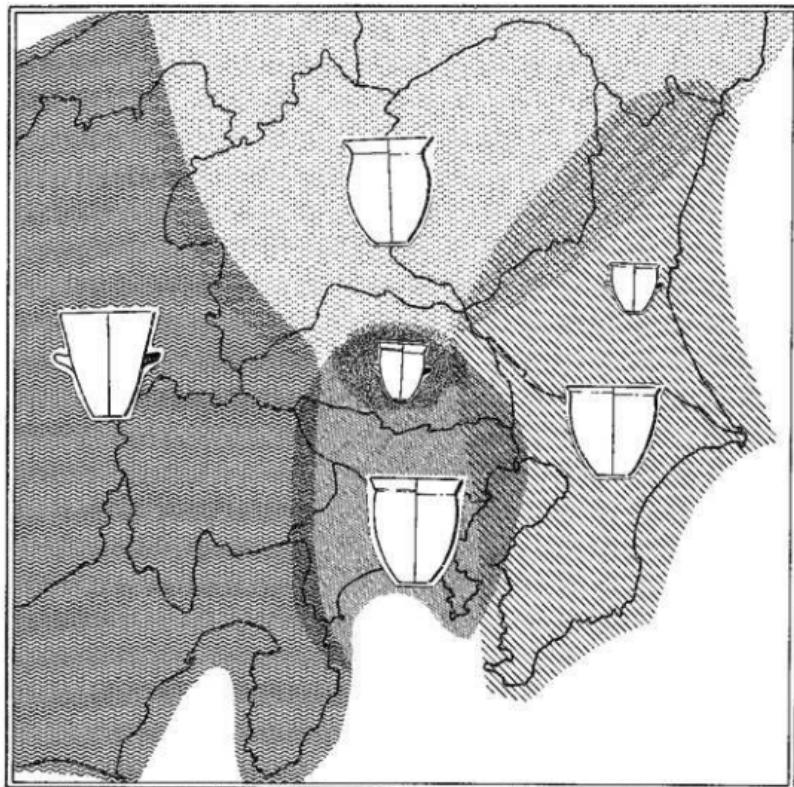
第21図 須恵器・朝鮮半島系大型壺土器の型



第22図 大形壺の孔

第23図 埼玉県各地域における大型飯の基本型





第24図 関東地方における大形瓶の基本型

は「畑作農業の盛行によって供給された大麦・粟・稗・豆類等が瓶形土器の機能を高め、(大形瓶)を受容せしめる要因になった」(柿沼1976)とした。また、(c)斎森紀巳子は労働力貢納に伴う携行食としての『糒』生産と捉えている(斎森1982)。大形瓶のこれららの説については、拙稿「器種組成の変遷と時期区分」(中村1984)で検討し、(b)説を補強したことがある。大形瓶によって携行・保存食としての糒が生産されたことは予想される。しかし、携行・保存食として糒が生産されたとしても、それは在地の内的要求によって出現した現象であり、これが収奪者の政策として直接的に労働貢納の付加的要素になることは有り得ないのでないだろうか。つまり当初の糒生産は、「貢納」という政治的色彩の強いものではなく、内的要求(各地域における労働力貢納を含めて)によってなされたものと考えたい。斎森によれば『かまどの出現(の背景)は、家父長的世帯共同体が畿内王権の組織下に編成され』(斎森1982)た結果と捉えるが、該期はその試みが為された段階であり、組織化には全く不十分な時期と考えられるからである。大形瓶の主要な役割は、半島から新たに将来された作

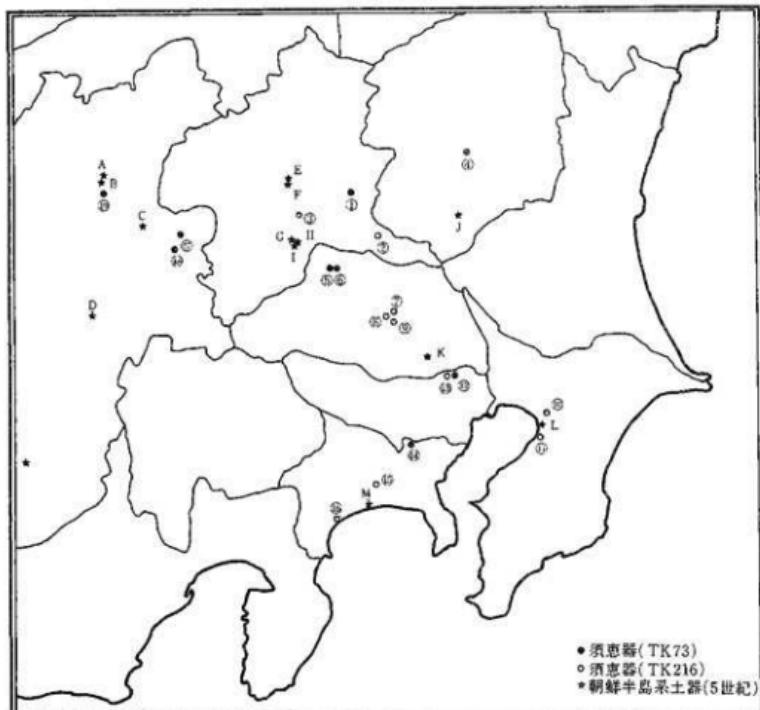
物による畑作の普及・拡大によって『蒸す』という調理方法が浸透した結果ではないだろうか。『蒸す』という行為は、半島の伝統的な調理方法である。大形甌の出土傾向は、個々の堅穴式住居跡単位で検出され、特別の傾向は認められない。大形甌の存在を政治的所産としてではなく、『文化的』的所産として捉えておきたい。

炉から竈への移行には、煮沸方法の転換という実用的な意義とそれを受容した政治的な背景の2つの視点からの検討が必要である。竈は波のように自然に押し寄せてきて、北関東に最初に漂着したのではなく、ある意図によって積極的に導入されたのである。当地方の竈導入以前の煮沸方法は、S字状台付甌として台で支える『浮置A方式』を完成させていた中心地域である。これは畿内を中心として展開した甌を紐で吊り下げる『浮置B方式』に対抗するものであった。台付甌は、受熱部を浮かせて熱効率を高める為に工夫された形態である。しかし、台の存在が炎いし真下から熱を受けることができないという限界も併わせ持っていた。煮沸に対する執拗な要求、熱効率の質的飛躍のための熱意が竈導入の原動力であった。竈導入は、大形甌の導入でもある。

#### c. 須恵器（第25図）

須恵器は大形甌と同様にモノ自身で波及することができるために、出現時期は竈よりも一般的に早い。初期須恵器と同様に朝鮮半島系土器も各地で散見する。併せて検討してみたい。東国における須恵器・朝鮮半島土器出現の意味は、何処にあるだろうか。これらの波及した器種は、大甌・甌・高杯・杯など比較的豊富である。しかし、機能的には土器と大差なく、日常雑器として使用されたとは考えられない。大甌は『酒甌』、甌は『注器』、高杯は『お供え器』として祭祀に関与したものであろう。祭祀に使用する目的で受容されたのである。初期須恵器や朝鮮半島系土器は、古墳よりも集落から出土するものが多いことが指摘されている（酒井1984）が、古墳出土のものも多い。つまり、石製模造品や高杯による伝統的な占墳祭祀の一環として、宝器的性格も加わって須恵器は受容されたものと思われる。笠森健一の論考を私意的に解釈すれば、従来の象徴観念であった無彩土師器（『黄』）と赤彩土師器（『赤』）の二極構造が複雑化し、須恵器の『青』を交えて三極構造になったと捉えた（笠森1978）。横穴式石室出現に象徴される『黄泉の國』の觀念の成立と符合するのである。模倣杯の出現は、須恵器に対する觀念の昇華・安定を意味する。

ここで関東各地の初期須恵器（TK73・TK216）・朝鮮半島土器（5世紀代）について、その分布を紹介しておこう。該期の須恵器については、「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」（北武藏古代文化研究会）・「南関東五世紀土器考」（比田井1988）を、朝鮮半島系土器については「東国の朝鮮半島系土器」（酒井1987）の成果を基にして作成したのが第25図である。これによれば、TK73・TK216段階の須恵器は若干の粗密はあるものの、ほぼ関東全域に分布していることがわかる。それでも北関東に若干多い。朝鮮半島系土器は、長野県・群馬県に集中する傾向がある。なかでも長野県では、比較的濃密にTK73段階の須恵器が分布している。例を挙げれば佐久市舞台場遺跡・御代田町前田遺跡・更埴市森将軍塚古墳・飯田市ツカノコシ古墳などがある。その他に、酒井清治「東国の朝鮮半島系土器」（酒井1987）も参考にして半島からの渡来品と考えられる資料を挙げれば更埴市城内の遺跡・同土口将軍塚古墳・同屋代遺跡・同屋代遺跡・丸子町鳥羽山洞窟遺跡・長野市四ヶ屋遺跡・同駒沢新町遺跡・中野市紫岩古墳などがある。もちろん南からの波及もあり、神奈川県・



第25図 東国における初期須恵器と5世紀代の朝鮮半島系土器(酒井1987他参照)

東京都に最古の須恵器をもたらしているし、神奈川県愛宕山下横穴からは朝鮮半島系土器が出土している。なお、TK23以前の須恵器窯の存在は坂本和俊(坂本1981)、酒井清治(酒井1984)や田口一郎(田口1987)によって想定されているが、TK73・TK216段階の須恵器窯は未だ確認されていない。該期の須恵器のうち内地産と目されるもの以外は、東海地方からの輸入品であることが指摘されている(酒井1984)。

ところで、須恵器製作が在地においてなされない場合、これらが搬入された微妙な時間差は存在する可能性がない訳ではない。該期の須恵器については、儀器的な要素から宝器的な性格が強く、伝世の問題を含めて『残存・混入』による共伴遺物の時間差は、有り得るのではないかと考えられる。例を挙げるのは避けるが、共伴関係に疑問を感じる資料も少なくない。共伴関係を直ちに須恵器の年代観に当てはめるには躊躇せざるを得ない。『残存・混入』は、個体の耐用年数によって偶然起こる現象であり、土師器にも当てはまる。これが土器編年を繁雑ないし混乱させる原因になっ

ている。須恵器は、あくまでも参考として捉えるべきである。須恵器に対する過度の信頼は、安易な土器編年の作成につながり、最も資料の豊富な土師器の検討を蔑ろにする危険性をはらんでいる。それでも地域間の併行関係や年代を把握するには、須恵器は有効な遺物である。本稿では、須恵器について時期決定の絶対的な根拠にしていないことは、前述したとおりである。

## ま　と　め

関東地方における竈に象徴される漸新な文化改革の波は、北関東の群馬県・埼玉県北部から浸透し、ここに文化的・政治的 colony が形成された。その経路は、中部高地経由であるが、それは跛行的に波及してきた。長野県における竈の導入は、Ⅲ・Ⅳ期である。毛野への入り口である佐久地方の御代田町前田遺跡でもⅣ期であり、基本的に竈の導入は遅れる。竈の普及という側面からみれば、長野県は毛野への通過点的様相を呈している。東海地方西部から中部高地・北関東との緊密な関係は、弥生時代では畿内とは異なった備び紋の分布地域として、古墳時代前期では S 字状口縁を持つ台付甕の分布地域としての共通性を有している。これらの確立されたルートを基盤として、竈は波及してきたものと考えられる。そして TK73・TK216段階の須恵器もまた東海地方からの搬入品が多いことが確認されている。また、5世紀の朝鮮半島系土器も東海西部に集中して出土している(酒井1987)。東海地方西部は邪馬台国に唯一届しない狗奴国に比定されており(田辺1963)、毛野はその狗奴国が新たな国として移り住んだ土地である。あるいは、日本海を経由して、直接中部高地に移入してきたことも検討する必要があるかも知れない。

ところで、東国の竈導入経緯に畿内政権が関与していたかが問題となる。5世紀代の歴史観を前方後円墳の普及や三角縁神獸鏡の分与にみられる事象を、畿内王権によって政治秩序に組み込まれる段階とみれば、竈の普及もその影響によってなされたと結論しなければならないだろう。そして、竈の伝播とその『思想』に「畿内政権」の介在(岩松1987)も想定されている。しかし、東国に比較して竈の出現時期も差程変わらず、また古墳時代後期の住居跡における竈導入率が30%前後の大阪府のような地域の指導下に竈の普及がなされたとは考えられない。まして畿内に先行して普及した北九州の竈が、畿内王権の影響によって出現したとも到底考えられない。なお、北九州でも竈に先行して朝鮮半島系土器の大形甕が直接将來されている(柳田1985)。また竈と同様に展開する大形甕についても、「労働力貢納としての編生産」(笠森1982)も地域政権のためであれば納得できないことはないが、畿内王権による収奪の手段として大形甕を捉えることはできない。つまり毛野王権による竈導入は、畿内王権の影響(指導)を受けて為されたものではなく、直接的な半島ないし西国との交渉によって獲得した可能性があるのではないだろうか。しかし、毛野王権が畿内王権の大きな影響を受けていたことは、布留式系土器が竈導入期に出土する(坂野1988)という事実を待つまでもなく、古墳に顕現している。究極まで完成された S 字状口縁をもつ台付甕を放棄し、新たな煮沸方法を模倣した結果の竈導入であろう。

東国の出現期の竈は、最も古い群馬県小神明湯気遺跡第26号住居跡で完成された構造をもつてゐる。完成された竈は、知識として認識しているのみでは構築できない。つまり、渡来人が直接移入してきた結果と考えたい。あるいは、既に竈の使用・構築に熟達していた西国人ないし彼の地に在

住の渡来人の移入であろうか。東国における竈導入の経路について、笹森健一は東山道ルートと東海道ルートの二者を想定している(笹森1978)。この二つのルートは共に存在しているものと思われるが、前者に連れて後者が確立したものと考えておきたい。群馬県を含めて関東各地域の稚拙な竈は、小神明湯気遺跡の所在する前橋市周辺に導入された竈の影響を受けて二次的に出現・波及したものもあるか。北関東から南関東への竈の波及については、須山幸雄「東原遺跡」(須山1972)でも指摘されている。すなわち、これらの周辺地域では知識として竈の存在を認識し、それから構築したのである。そのために primitive な竈が導入期に存在するのである。これは、竈の「自生的出現」と同様な現象を呈する。そして在地における竈の受容は、その社会が一定の発展段階に達した時点で行なわれる所以である(高橋1975)。大形瓶についても即ち的に模倣した埼玉県武良内遺跡例については、渡来人(or 西国人)の存在が予想されるが、その他の大形瓶は竈の導入と同様に在地において模倣されたのである。

現在、須恵器の生産開始時期は前述したように4世紀末から5世紀初頭に比定されている。そして定型的な竈も、福岡県塚原遺跡(馬田1985)において5世紀初頭から出現している。東国にこの文化改革の第一波が届いたのは5世紀第1四半期(I期)であり、それは埼玉県愛宕遺跡の大形瓶や各地から出土するTK73段階の須恵器にも見られた。竈が出現するのは5世紀第2四半期(II期)であるが、東国にはまだ満遍なく普及するのは5世紀第4四半期ないし6世紀前半になってからである。竈の導入は一朝一夕にして成された現象があるが、我が国に竈が出現してから100年、関東に竈が出現してからも、実に50年以上の歳月を必要として竈は定着したのである。

本稿を草するにあたり、塙野 博・鈴木重信・水沢 裕子・田代 隆・加部二生・吉田 稔・中村香葉らの諸氏に資料の提供や実見の便宜を計って戴いた。また、高橋一夫・笹森健一・鈴木徳雄・利根川章彦の諸氏からは、本稿に限らず常日ごろから辛辣なご助言を賜っている。しかし、学兄の好意に応える内容と成っていないのは、筆者の不徳と致すところである。また、富田和夫氏とは資料の収集や討議など共同作業を行なってきた。本来ならば共著すべきであるが、氏の御好意によって拙著とさせていただいた。以上の各氏のご協力に対し、心より感謝を申し上げる次第である。

## ＜引用文献＞

- ⑥会田 明 1978『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会  
新井 端 1982『塙前遺跡、発掘調査報告書』江南村文化財調査報告書第3集 埼玉県江南村教育委員会  
井川 達雄 1984『熊野堂遺跡(1)』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第3集 群馬県教育委員会  
井川 達雄 1985『三ツ寺遺跡、保渡田遺跡、中里天神坂古墳』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集 群馬県教育委員会  
石坂 茂 1986『荒砥北原遺跡』群馬県教育委員会  
石野 博信 1975『考古学から見た古代日本の住居』『家』社会思想社  
井野 修二 1986『湯気遺跡』『小神明遺跡群』前橋市教育委員会  
井上 尚明 1986『将監塚・古井戸1』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第64集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
井上 太 1981『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市文化保護協会  
今泉 泰之 1974『駒城』埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会

- 岩松 保 1987 「カマドのある住居無い住居—京都府南部の場合」京都府埋蔵文化財論集第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大川 清 1955 『落合』早稲田大学考古学研究室報告
- 人越 忠士 1980 「西原遺跡」「母姫V」福島県文化財調査報告書第85集 福島県教育委員会
- 大島 和子 1979 「推現山北遺跡」宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第5集 宇都宮市教育委員会
- 人場 雪雄 1955 『平出』平出遺跡調査会
- 奥村精一郎 1984 「八幡地区薬塚整備事業関係遺跡、昭和58年度発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報(1984)」京都市教育委員会
- 小沢 国平 1957 『本庄市二本松第3住居址発掘調査報告』本庄市教育委員会
- ④柳沼 修平 1982 「V、房縁の鬼高朋の諸問題 一まとめにかえてー」『日本考古学研究所集報IV』日本考古学研究所
- 柳沼 幸夫 1976 「瓶形土器に関する一考察 ～南関東地方出土例を中心としてー」『埼玉考古』第15号 埼玉考古学会
- 柳沼 幸夫 1978 『東谷・前山2号墳・古川塚』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
- 柳沼 幸夫 1979 『下田・源訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
- 金子 貴士 1977 『池田・武良内・高畠』埼玉県道路発掘調査報告書第11集 埼玉県教育委員会
- 北武藏古代文化研究会他 1987 「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」第8回三県シンポジウム
- 栗本 佳弘 1970 「大塚塚遺跡」「東関道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」東関東自動車道遺跡調査会
- 小久保 徹 1978 『東谷・前山2号墳・古川塚』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
- 小久保 徹 1979 『下田・源訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
- 猪宮 史朗 1976 『本郷東・安宮』埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集 埼玉県教育委員会
- 猪宮 史朗 1987 「埼玉県出土の古式須恵器」「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」第8回三県シンポジウム 千曲川水系古代文化研究所
- ⑤酒井 清治 1984 「関東地方」「日本陶磁の源流」須恵器出現の証を探る 柏書房
- 酒井 清治 1987 「東国との朝鮮半島系土器」「弥生・古墳時代の大陵系土器の諸問題」埋蔵文化財研究会
- 坂口 一 1987 「東国須恵器の一様相」関東甲信地方における出現期の須恵器について『考古学雑誌』第74卷 第1号 日本考古学会
- 坂本 和俊 1981 「ミカド道路出土の須恵器をめぐる問題」「金城遺跡群」見玉町文化財調査報告書第2集 埼玉県見玉町教育委員会
- 坂本 和俊 1987 「東国における古式須恵器研究の課題」「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」第8回三県シンポジウム 千曲川水系古代文化研究所
- 徳森紀巳子 1982 「かまと出現の背景」「古代」第72号 早稲田大学考古学会
- 井森 健一 1978 「平安時代の諸問題」「川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡発掘調査報告書」郷土資料第21集 上福岡市教育委員会
- 白石太一郎 1985 「年代決定論」「日本考古」1
- 白鳥 良一 1974 「岩切鴻ノ糸遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書」宮城県文化財調査報告書第35集 宮城県教育委員会
- 須山 幸雄 1972 「横浜市緑区東原道路発掘調査報告書」横浜市埋蔵文化財調査報告書(1) 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 清野 利明 1979 「吹上遺跡 第8次調査」日野市遺跡調査会年報Ⅱ 日野市教育委員会
- ⑥高橋 一夫 1975 「和泉・鬼高朋の諸問題」「原始古代社会研究2」校倉書房
- 田口 一郎 1987 「古式須恵器をめぐる諸問題」「群馬県の在地窯の古式須恵器」第8回三県シンポジウム

- 田代 隆 1984『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告書第57集 財團法人栃木県文化振興事業団
- 田辺 昭三 1968『謎の女王卑弥呼』邪馬台國とその時代 德間書店
- 田辺 昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 谷井 慶 1974『猪塚』埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会
- 田部井 功 1976『弥藤呂新田遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第29集 埼玉県遺跡調査会
- 都出比呂志 1982「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』第67巻第4号 日本考古学会
- 利根川章彦 1982「古墳時代集落構成の一考察 一見玉地方の5~8世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として」『土曜考古』第5号 上野考古学研究会
- ②中村 倉司 1979「鬼玉郡における鬼高式土器の編年について」「字佐久保遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第38集 埼玉県遺跡調査会
- 中村 倉司 1982「大形埴 一埼玉県を中心として」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会
- 中村 倉司 1984「器種組成の変遷と時期区分―古代北武藏の例から―」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 中村 倉司 1987「弥生時代における壺形土器の煮沸方法と熟効率」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学会
- 西谷 正 1983「加賀地域と北部九州」九州歴史資料館開館10周年記念『大平府古文化論叢 上巻』吉川弘文館
- ②服部 敬史 1966・67・68『八王子中田遺跡(資料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)』八王子市文化協会
- 服部 敬史 1973『船田』八王子市船田遺跡調査会
- 坂野 和信 1988『葛原入間の土器』『紀要』第二号 木庄市立歴史民俗資料館
- 比田井克彦 1988『南関東五世紀土器考』『史録』第20号 史録同人
- 富加見泰彦 1979『鳴神地区遺跡発掘調査概報』、Ⅱ 和歌山県教育委員会
- 藤田至希子 1986「第6節 古墳時代前期の煮沸形態について 一矢部遺跡を中心に」『矢部遺跡』奈良県教育委員会
- ②馬田 弘稔 1985『坂堂遺跡Ⅳ』福岡県教育委員会
- 村山 好文 1981「房総における鬼高期の研究(資料編)」『日本考古学研究所集報』Ⅲ 日本考古学研究所
- 村山 好文 1982「房総における鬼高武士器編年試案」『日本考古学研究所集報』Ⅳ 日本考古学研究所
- 村山 好文 1982「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報』Ⅴ 日本考古学研究所
- 茂木 雅博 1984「V茨城県」「古墳時代土器の研究」古墳時代土器研究会
- 茂木 由行 1984「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』第9号 群馬県考古学談話会
- 守屋 幸一 1987「東京都」「第8回三県シンポジウム 東園における古式須恵器をめぐる諸問題」千曲川水系古代文化研究所
- ②柳田 康雄 1985『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集 福岡県教育委員会
- 山崎由美子 1974『篠山遺跡』東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 栃木県埋蔵文化財報告書第12集 栃木県教育委員会
- 山本 貴之 1980「第12章 志筑遺跡」「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書!」茨城県教育財团
- 横川 好富 1963『野田市三ツ堀遺跡』野田市文化財調査報告書第一編 野田市郷土博物館
- 横川 好富 1968『松伏村前田遺跡』埼玉県松伏村教育委員会
- 横川 好富 1987「竈の出現とその背景—埼玉県を中心として」『埼玉の考古学』柳田敬司先生追憶記念論文集刊行委員会編 新人物往来社
- 吉川 国男 1969『高井遺跡』桶川市文化財報告Ⅲ 桶川町教育委員会
- 吉川 国男 1976『高井北遺跡』桶川市文化財調査報告書第8集 桶川市教育委員会
- ②和田 雄次 1986『新池台遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第17集 茨城県教育財団

## 研究紀要 第6号

1989

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒331 大宮市柳町2-499 048-652-2231

印刷 新日本印刷株式会社